

電力王・福澤桃介

軽薄な私が如何にして成功者となりしか

江上 剛

第一回

第一章 美少女

一

私は、けいはく軽薄である。しかし才能はあると思う。そして何者かになりたいたの野心も持っている。

「おい、ももすけ桃介。何をぶつぶつ言っているんだ」
同室のうえのかんのすけ上野勘之助が言った。

上野は、将来、法学者になると言っているが、軍人の方が向いているくらいけんか喧嘩が強い。

狭い寮の部屋の真中にどてらを着て、どっかりとあぐら胡坐座りをしている。

股の間には、またしゃれこうべを抱きかかえ、それを灰皿にタバコ煙草をくゆらせている。

「自分の生き方について考えているんだ」

「深刻なことか」

上野の口から白い煙が噴き出ている。

「まあ、大したことはない。俺は、いったい何者なのかということだ。それで呪文を唱えている」

「呪文？ いささか非合理的であるな」

「非合理も合理もない。この世は理屈の合わないことの方が多い。お前の股の間のしゃれこうべもそうだろう。泥棒か、政治犯か知らんが、この世に恨みや未練をたっぷり残したまま首を刎ねられたんだ。俺たちは、度胸試しで掘り返したが、さすがに煙草盆にするのはどうかと思うぞ。ほら、股の間から靈気が出ているぞ」

私は、笑いながら上野の股を指さした。そこからゆらゆらと白い煙が立ち昇っている。

うかつにも煙草の火を股引の上に落とすのだ。

「あああつ！」

上野が飛び上がって両手で股引を叩く。

「おいおい、煙草を持ったまま股引を叩くと、さらに火が燃え移るぞ」

「あつ」

上野は目を剥いて、手に持った煙草を見つめ、慌ててしゃれこう

べの中にもみ消した。

ようやく股引からの煙が消えた。

「オイ、桃介、早くから気づいていたなら注意してくれよ」

「罰ばちが当たったと思えよ」

私の言い方が気に障ったのか、上野は腹立たしげに顔を背けた。

しやれこうべは、鈴ヶ森すずがもりの刑場跡から掘り出してきたものだ。

鈴ヶ森は、明治四年（一八七四）まで犯罪人の処刑場として二百年以上もの間、使われてきた。

江戸を騒がした天一坊てんいちぼうや八百屋お七もこの場所で首を刎ねられた。

私は、夜に鈴ヶ森に行き、しやれこうべを掘り返す肝試きもためしを塾生に提案した。

実は、私は、臆病でもある。決して勇猛果敢ゆうもうかかんな人間ではない。

喧嘩けんかしている場面に遭遇したとしよう。やられている者が弱そうで、勝っている者が大柄で無頼漢であつたら、人はどうするだろうか。

腕うでに自信のある人なら、待った、待った、この喧嘩は俺が買ったとばかりに仲裁に入るだろう。

しかし、これはうまく行くことは少ないのではないか。仲裁に入る人が、喧嘩けんかをしている無頼漢より外見上も圧倒的に強いと思わせなければならぬ。

仲裁者が無頼漢の兄貴分であれば、たちまち喧嘩は収まり、やられていた者は、ほっとするだろう。しかしその後、どんな見返りを要求されるかと思うと心配になるかもしれない。

私が生まれたのは、明治元年（一八六八）のことだ。この年は薩長軍と徳川軍の戦いが起こったが、江戸が焼かれなかったのは、西郷隆盛と勝海舟の会談の結果であると言われる。

この二人が仲裁者であるとすれば、それぞれの軍を抑えるだけの力を持っていたということだ。江戸の住民は、二人の力の大きさに感謝せねばなるまい。

私を含めて大方の人は、無頼漢を見て、喧嘩を見て見ぬ振りをし、こそそとわき道にそれるに違いない。そして、大方の人は、そんな臆病で意気地のない自分を大いに恥じ入るに違いない。

私は喧嘩の仲裁に入ることに利益がないと瞬時に判断する能力を持ちあわせている。しかし、私は、こそそとわき道にそれるような態度はとらない。くるりと踵かかとを返し、歩き去る。大方の人と違うのは、喧嘩の場からいなくなることに恥じ入ることはなく、忘れてしまうことだ。

こんなことにいちいち恥じ入っていたら心を病んでしまう。人生には意に沿わないことの方が多い。

だから臆病であると言うのとは、少し違うかもしれない。臆病な

自尊心というべきか。

私のような者が、浅ましい喧嘩に関わることはないと言いに聞かせるのだ。

一方で臆病であることで危機管理意識が強い、自分の安全に関する感度が高いという特質もある

まあ、どんなに言葉を尽くしても臆病であることには違いない。

そんな私が、なぜ鈴ヶ森刑場での夜中のしやれこうべ探しというバカげた肝試しを寮生に提案したのか。

それは目立つためである。存在感を示すためである。

私は、慶應義塾けいおうぎじゅくに運よく入ることができた。しかし、ここには名士の子息が集まっている。そのほとんど全てが、塾長の福澤諭吉ふくざわゆきちに憧れている。それが入塾の動機であると言っている。

私は？ 全く違う。

埼玉県川越かわごえの農家で貧しく育った私は、このままくすぶってしま
うのはなんとしても嫌だった。

父は、それなりの資産家に生まれたのだが、分家の末であったために土地も財産もなかった。

それに加えて百姓仕事よりも文章を書くなど、机仕事が向いている人だった。そこで文字入れの能力が必要な提灯屋ちようちんとなったが、それほど商売にはならなかった。

畢竟、暮らし向きは厳しくなる一方で、兄は、勉強が嫌いだったこともあり、幼くして奉公に出た。

私は、それは嫌で、必死で勉強した。貧しい暮らしから抜け出すには、勉強して、将来性があると、多くの人に認めさせる必要があるからだ。

篤志家とくしかと言われる人は、自ら費用を出資し、郷党きやうとうの優秀な男子の後援をする。彼らを出世させ、その後の恩恵に与ろうというのだ。

私も篤志家に認めてもらえれば、世に出られるかもしれない。そう信じて勉強をした。

おかげで私は、郷党の異才とでもいうべき才能を発揮し、優秀な少年という評判が近在にとどろいた。

そして明治十六年（一八八三）に、十六歳で慶應義塾に入ることができた。

慶應義塾は、時事新報の主筆であり、明治の啓蒙家けいもうかである福澤諭吉が創立した塾である。ここでは失礼にあたるので先生と呼ばせていただく。

創立以来、築地つぎじなど移転を繰り返したが、三田みたの旧肥前ひぜん・島原藩邸の土地に移り、慶應義塾となって以来、先生の教育が、評判を呼び、多くの若者が集まってきた。

先生は、明治という新時代で飛躍した人物を応援した。特に海運

で成長した三菱の岩崎弥太郎を評価し、深い厚誼を結んだ。先生は岩崎の求めに応じて教え子たちを三菱に送り込んだ。その後、三菱が日本一の金持ち会社となったことも、多くの若者が慶應義塾に集まる理由だろう。

私に慶應義塾に入るよう勧めてくれた人も同じだ。私が、実業界でひとかどの人物になるには、この塾が良いだろうと言った。

塾に入ってみると、これは大変だとすぐに悟った。私の危機管理意識が敏感に作用したのである。

天才もいれば、運動能力では誰にも負けないとか、演説が大得意であるとか、とにかく多士済々なのだ。

負ける、と思った。このままでは埋没してしまう。川越では異才、秀才と言われたが、ここではただの人になる可能性が大いにある。なにしろ全国から、先生の教えを受けることで、世に出ようと考えている野心家ばかりが集まっているのだから。

さらに私は、自分でいうのもおこがましいが、美男子である。身体も華奢なので、女装すれば、女として通用するだろう。

寮は、男ばかり。それも若い盛りだ。女に飢えている男が、私を襲い、組み従えないとも限らない。

深夜、寮でうかうかと寝てはられないのだ。

さて、どうしたものか。私は考えた挙句、目立つことにしたのだ。

それは川越でも同じだった。とにかく目立つことで篤志家の注目を浴びねばならない。

そこで私は、行動の第一の目標をとにかく目立つことに置いた。みんなが教室で熱心に教師の話を聴いている時、ガラクタを紐にくくり、廊下をうるさく、耳障りな音を立てて歩く。

教師が、誰だ！ と怒鳴どなったら、もうその時は姿を消す。桃介の奴だな、と思わせればいいのだ。

しかし、その教師の授業では満点を取るものだから、教師もむやみに叱ることができない。

そんな馬鹿なことを繰り返しているうちに、私にまつわる伝説めいた噂が塾内に流れるようになった。

桃介は、天才である、勉強をしないでも全てわかっている、なぜあんなに成績がいいんだ、などなど。

実を言うと、皆が寝静まった深夜にむつくりと起き出して、勉強をしているのだ。もし、将来、私が健康を害することがあれば、このような無理な生活を続けていることが原因だろう。

さて、しゃれこうべ掘り出しの肝試しは話題を呼んだ。勿論、教師もちろんたちには秘密だ。

俺も、俺も、と参加を名乗り出た者はいたのだが、結局、当日に参加したのは、上野ともう一人だけだ。

皆、なんだかんだと理由をつけて、いち抜けた！と消えていった。

思うつぼだ。これでますます私の評判が上がり、目立つことになる。こうなればしめたものだ。塾での私の地位は盤石ばんじやくになるだろう。

しかし鈴ヶ森は、暗く、やや湿り気のある重い空気で、決して気持ちの弾むものではなかった。

当然のことだ。何万という人間がこの世に未練や恨みを残して斬首された場所だ。

おい、早くしろ！

私は、上野たちを励ました。

私だけ、シャベルを持たない。というのは、あり得ないとは思っているのだが、生身の首が掘り出されたら、すぐに逃げ出そうと思っているた。

実はビビっていたのだ。しかし、そんな様子はみじんも見せることはなかった。

初めての掘り出しで、一個のしゃれこうべを持ち帰った。その後も何度も挑戦し、計十個のしゃれこうべを持ち帰った。

灰皿に使っているのは上野だけだ。私は、さすがにそんな使い方はしない。一応、敬意を払って書棚に飾っているが、いつも誰かに見つめられているようで気が晴れない。まとめて鈴ヶ森に戻すか、

ちゃんと供養くようしようかと考えている。

「おい、上野、お前は、法学者になると言っていたな」

私は、しゃれこうべを手に持ち、撫なでながら聞いた。

しゃれこうべの空虚な暗い目が私を見つめている。

「うーん」上野は吸っていた煙草をしゃれこうべに押し付けた。

「どうしようかと迷っている」

「方針変更か？」

「変更ということではない。今でも法学者がいいという気持ちはある。しかし先生が、実業界がいいと言われるので、それもいいかなという思いだ」

福澤諭吉は、官吏と銀行員にはなるなと言うのが持論だ。可能な限り独立自尊で行け、独立してどんなものにも束縛されぬ自由な人間であれという。

「桃介はどうなんだ」

「わからん」

「わからんはないだろう。政治家か実業家か」

「わからん」

「俺が見る限り、お前はとてつもなく大成功を収めるか、逆にとてつもなく大失敗おちいに陥おちいるか、どちらかであると思おもう」

「八卦見はっけみのようなことを言うな」

「お前は一種の天才だ。しかし天才が必ずしも成功者となるとは限らん。天の時、地の利、人の縁に恵まれなとな」

「すべては運ということか」

「まあ、そういうことになる」

「俺は、川越の水呑み百姓の小せがれだ。貧しさの中で育った。父も母も、決して卑しい生まれではないが、分家の分家で、とにかく貧しかった。だから俺は金持ちになって本家の連中に復讐を果たす思いだった」

「復讐とはまた物騒な言い回しだな。札束で顔をひっぱたくつもりなのか」

上野は笑った。

「そんな下品なことではない。金の虚しさを教えてやりたいというか……。まだ復讐の方法はよくわからん」

私は、わからんと繰り返した。実際のところ、よくわからないからだ。

川越にいるときは、とにかくこの旧弊な地から抜け出したい一心だった。だから神童、鬼才と言われるまで優秀さを周囲に見せつけた。

しかし塾に入ると、私などはその他大勢の中に埋没するほどの才能溢れる者たちがいた。

私は井の中の蛙かわずだったことに気づき、愕然がくぜんとした。

そこで私は、奇抜な行動と勉強をしていない振りというある種の偽悪で目立つことを選択した。

その成果は十分に結実し、私は今や、塾の中で十分に存在感を示していると言っている。

しかし、それがどういう意味を持つのかは全くわからない。

目立つ、奇矯ききょうな行動で先生の目に留まり、認められ、先生の紹介で実業界に出て、それなりの地歩を築こうとしているのか。しかし、それでいいのか。私には私の人生が良くわからない。川越にいるときは、単純に、東京に出て偉くなり、郷土に錦を飾るという思いだった。しかし塾おに於いて多様な人間と接触し、彼らの野心に触れることで目標を見失ったのかもしれない。

上野は、私のことを大成功か大失敗かの二者択一の人生だと、八卦見のようなことを言った。

しかし、実際は、大失敗の方であろう。なぜなら決して先生の覚えがめでたくはないからだ。奇矯な行動を好ましく思われていないのはよく理解している。先生は、真面目まじめで実直な人間が好みだ。先生自身がそういう方だからだ。

私のような偽悪的な人間の複雑な思いはわからないだろう。

「悩みも愉快の内なり。愉快たんできに耽溺する間に人生は過ぎ去っていく

……」

上野がつぶやくように言った。

「誰の言葉だ」

私は聞いた。

「俺の述懐だ」

上野が微笑んだ。

「くだらん。愉快を極めたい」

私は、思い付きのように言った。

私は、明治元年の生まれである。すなわち明治という新時代と自分の成長が並走しているのだ。

また塾の創立年でもあることを思うと、今、その塾生となつていくことは奇しき運命でもある。

薩摩や長州の武士たちが徳川幕府を倒し、新政府を立ち上げると、怒涛どとうの改革を行った。

かつては街にちよんまげ、帯刀の武士が闊歩かつぽしていたのだが、瞬間またたに西洋風が変わってしまった。

新政府を立ち上げた西郷隆盛や大久保利通が相次いで非業の死を遂げると、伊藤博文、大隈重信らの新しい人材が、新政府の枠組みを作っていた。

それを追いかけるように、岩崎弥太郎などの成功者が多く出現す

るようになった。

これらを思想的に支えたのが先生だ。先生は、慶應義塾を作り、新時代に相応しい人材を育てようとされている。その思想は、独立ふさわ自尊。とにかく日本は、ちゃんと両足を踏ん張って立たねば、欧米列強の食い物になってしまうという危機感から、その思想は生まれている。

明治十四年（一八八二）に伊藤博文らとの政争に敗れ、下野げやした大隈重信の政治活動を理論面で支えたのも先生である。

明治二十三年（一八九〇）には憲法が施行され、国会が開設されるという。日本は、ものすごいスピードで変化しつつある。その勢いに私たちが煽あおられていないこともない。どこか浮足だっている。世に出るチャンスが到いたるところに転がっているような気がするのだ。

しかし世の庶民たちは窮乏きゆうぼうしている。新政府が引き起こした西南戦争や過度な改革により、金の価値が下落し、インフレーションが進行したのだ。

大隈が下野し、対立していた松方正義まつかた まさよしが大蔵卿おおくわいになると、今度は極端なデフレーション政策を採用した。

巷ちまたに流通する金を吸い上げ、日本銀行を作り、通貨をコントロールしようとした。

この構想は悪くはなかったが、このデフレ政策は、庶民には人気

がない。せっかく作った米や作物が安く買い叩かれ、収入の無くなった庶民は、借金せざるを得なくなった。その結果、窮乏生活へと追い込まれていった。

明治の新時代の流れに乗って成功した者と、没落してゆく者、この二つの流れの乖離かいりは大きくなるばかりだ。

金持ちや政治権力を握った者は、ますます威張り、両者の関係は剣呑けんおんになっていく。一方、貧しさから抜けられない庶民は、ますます貧しさの底に落ちていく。

私は貧しく育った。貧乏の悲惨さを嫌というほど経験している。貧しさに追い詰められた者たちは、金持ちに対して戦わざるを得なくなる。社会主義的な思想の蔓延まんえんも危惧きぐされる世の中になってきたように思う。

そんな時代を愉快に過ごすことなど可能なのだろうか。

塾生の多くは、実業界や政界で成功して、豊かで愉快な人生を送りたいと願っているように思える。しかし私は、少し違う。もしかしたら貧しい者の側に立つ社会主義者になるかもしれない……いやいや、そんな柄ではないか。

「おい、いるのか」

突然、ドアが開き、原田敬吾はらだけいごが飛び込んできた。

「いきなりどうした？ 戦争でも起きたか？」

私は笑いながら言った。

「戦争は、近々起きるぞ。なにせ政府は、清国と事を起こそうと虎視眈々と狙っているからな」原田は言った。「いや、そんなことではない。君たち、まず俺の話を聴いてくれ」

「わかった。聴こう。清国との戦争以上に重要な話だな」

私は言った。

「そうだ。特に桃介には聴いてもらいたい」

原田の何やら不敵な笑いが不気味だ。

「いったい何事だ」

上野が言った。

「女だ。それも飛び切りの美人だ。それが両国橋に現れるのだ」

原田が上野ににじり寄るように迫った。

「美人？ それはいい。聞き捨てならん」

上野が、尊大な態度で腕組みをし、どっしりと胡坐をかきなおした。

「桃介は興味はないのか」

原田が聞いた。

「ない。女は所詮、女に過ぎない。そんなものにうつつを抜かし、時間を無駄にしたくはない」

「面白くないことを言うな。飛び切りの美人、見たことも出会った

こともない美人だぞ。それでも興味はないというのか。やせ我慢するな。今回の企てにはお前の力がぜひ必要なのだ」

「俺の力？」

私は俄然、がぜん興味を覚えた。愉快なことが待っている予感がしたのだ。

「話すぞ。いいか？」

原田が身を乗りだした。

「両国橋界限に、白馬に跨またがって疾駆する美少女が現れるんだ。彼女は、なんでも成田山のお不動様を深く信仰しているらしく、そこまなりたさんで馬で駆けてお参りをする。その道すがら、両国橋を渡り、大川の土手を走るんだ」

原田の目がうっとりとし、焦点がぼやけ始めた。白馬の美少女を想像しているのだろう。

「それでその女と俺と、どのような関係がある？ 俺が必要な理由わけを言えよ」

私は言った。

原田は、夢見心地から覚め、真面目な顔に戻り、私を見つめた。

「俺は、その美少女と知り合いたいのだ」

「はははは」

私は原田の真面目な顔を見て、笑ってしまった。あまりにも真剣

だったからだ。

「笑うとは何事だ。失礼だろう」

「すまない、すまない。ところでその女はどこよしちようの誰なんだ」

「噂によると、はんぎやく 葎町の半玉で小奴こやうこというらしい」

「これまた……葎町か」

東京には花街といわれる柳橋、浅草、向島、赤坂、新橋、神楽坂、そして葎町などがある。

これらは花柳界ともいわれ、料理屋や待合茶屋、芸者置屋があり、多くの男たちを喜ばす遊興の街である。

「芸者置屋はまだ浜田屋の半玉だな」

上野が言った。

「知っているのか」

私は、少し驚いた。

「ああ、噂には聞いたことがある。まだ十四歳くらいだが、たいそう色っぽく魅惑的みわくだそうだ」

上野までその女を知っていると聞き、私は、驚くとともに少し腹立たしく思った。世情に疎うといようでは、この変化の激しい時代に生き残ることはできないと思ったからだ。

「それで俺に何を期待している」

「正直に言おう。悔しいが桃介は二枚目だ。いや、それ以上である。」

美しいと言っていい。男ばかりの塾でお前に惚れてしまいたいそうになったこともある。昔なら十分に若衆宿わかしゅやどで人気を博すだろう」

原田が真面目に言った。

「おいおい、からかうな。若衆宿なんていつの話をしているんだ。尻の穴がむず痒がゆくなる」

私は苦笑した。

若衆宿とは陰間茶屋かげまとも言い、美少年が春を鬻ひきぐ廓くわわである。女犯にょぼんを禁じられた僧侶などが客であったという。

原田に言われるまでもなく、私は自分で言うのは憚はばかられるが、整った顔立ちである。街を歩いていても女性が振り向くことがしばしばある。そのことと葭町の半玉とどのような関係があるのか。

「俺はむくつけき男だ。とてもその美少女を惹きつけることはできない。自明の理だ。そこでその役目を桃介に引き受けてもらいたい」

「なんと!」

私は原田の計略に驚きの声を上げた。

「それはいい。俺も乗った」

上野が弾んだ声で言った。

「小奴が成田山にお参りし、両国橋辺りを通りかかる日時は押さえである。その辺りの情報収集は任せてくれ」

原田は胸を叩き、自慢顔になった。馬鹿なことにつつつを抜かし

ているものだ。このような情報を得るために浜田屋に近い者にどれだけの金を使ったのだろうか。

「小奴が通りかかったらチンピラを差し向ける」

「相手は馬だぞ。蹴り倒される」

「大丈夫だ。ぬかりない。大きな音を立てれば馬は驚くだろう」

原田は自信たっぷりだ。

「そこへ桃介と俺がさっそうと登場するんだ」

「俺も加えてくれ」

上野が口を挟んだ。原田がきりりと睨^{にら}んだ。

「仕方がない。上野も加われ。では桃介と俺と上野がさっそうと現れる。そしてチンピラを蹴散らす。小奴は、感謝して俺たちに礼を言うだろう。もちろん、桃介に目が留まるのは仕方がない。しかし派手に立ち回ったのは俺だ」

「俺も」

上野が自分を指さす。

「少し黙っていてくれ」原田がうるさそうな表情を上野に向ける。

「その場で知り合いになれば、あとはなんとかする。俺が浜田屋の客になってもいい。桃介はそこで退場だ。わかったな」

原田がぐっと睨^{にら}むように私を見つめた。

私は呆^{あき}れた。よくぞこんな三文芝居^{あき}を考えたものだ。ばかばかし

い。

「チンピラは、どうする？ 適当な者がいるのか」

「そんなのは、これでなんとかする」

原田が指で丸を作った。金で雇うつもりのようなのだ。

「うまくいくと思うのか」

「絶対にうまくいく。桃介次第だ」

「俺はとにかくその小奴とやらの目を惹けばいいだけだな」

私は熱意なく聞いた。

「その通りだ。やってくれるか？」

原田がさらに身を乗り出してきた。

「退屈していた時だ。無聊ぶりようを慰める座興なぐさとしてやろうじゃないか」

私は言った。

正直なところ、気の乗らない風を装ってはいたものの小奴という美少女に興味を抱いた。会ってみるのも愉快ではないか。

人生、愉快に渡るに限る。

二

私たちは、両国橋たもとの袂たもとで美少女を待った。

成田山新勝寺しんしょうじに行く参拝道みとは、水戸街道みとを葛飾かつしかの新宿にいじゆくから分か

れた成田街道を進むのが一般的だ。

「いずれにしても葭町に戻るには、両国橋を通る」

原田が自信を持って言った。

「旦那、馬に蹴られやしないでしょうね」

自信なさげに原田に話しかけるのは、原田が雇ったチンピラだ。地元の地回りらしいが、どうも威勢は良くない。若いには違いないが、腰つき、立ち居振る舞いは、頼りない。

原田は、腕が立つ男だと言ったが、まやかしだろう。塾生の原田が地回りに知り合いがいるとも思えない。どこかの待合料亭で知り合った幫間の類ではないだろうか。とりあえず幫間男ほうかん たぐいということにしておこう。

「大丈夫だ。馬は人間を恐れる動物だ。正面に立って、こうやって」
原田が両手を広げて見せた。「どうどうどう、待ちやがれ。天下の大道を若い女が馬を走らすとは、どういう了見だ、と大声を出せばいい。後は俺たちに任せろ」

原田は、さも自信ありげに肩をそびやかす。

「こいつを本気で叩きのめしていいのか」

上野が原田に聞いた。原田の方が幫間男より身体が大きくがっしりしている。

「旦那、勘弁してくださいよ」

幫間男が、怯おびえたような目つきで上野を見つめた。

私は、小奴を脅かすことに関心があるわけではない。そんなことはどうでもいい。ましてや原田が書いた三文芝居の脚本が上手いくとも思わない。疾駆しゆくする白馬と美少女に見とれて、口をあんどりと開けている間に、何事もなく終わるであろう。

もし、小奴が本当に魅力的な女性なら、その瞬間に自分がどんな行動をとるのか、それが興味深い。

自分の行動を興味深いなどと言うのは、おかしいかもしれない。しかし私は、自分を別の自分が見つめ、評価し、判断を下している気分になることが多い。

例えば、ある行動を実行しようと考えて。それに対する周囲の反応を想像して、その渦中かなにいる自分の精神状態を想像する。そしてそれが理にかな適うのであれば、実行するのだ。

慎重と言え、臆病。臆病と言え、臆病。計算高いと言え、計算高い。

自分でも決して愉快的な性質ではない。しかし時には、突飛な計算外の行動を試してみたい。それが愉快につながる。もしかして小奴はその契機になるかもしれない。

「しっし、あっちへいけ」

幫間男が近寄ってくる犬を追い払った。最近、野良犬が増えてき

たのだろうか。

うろう、と犬が幫間男に向かって唸り声を上げ、黄ばんだ牙を剝きだしている。

「嫌だね。私は、犬、嫌いなんですよ」

幫間男が情けない顔をする。近くに落ちていた木の枝を取り上げ、犬を「しっし、あっちへ行け」と強引に追い払った。

「たった一匹じゃないか。ビビるな。情けない奴だな」

原田が顔をしかめる。

「オイ、静かにしろ。聞こえないか」

上野が真剣な顔で耳をそばだてた。

「聞こえる、聞こえる」原田の表情が一変し、明るくなった。「来るぞ、来るぞ」

「ええ、来るんですか」

幫間男が泣きそうな顔になりながらも、準備運動のつもりなのか膝の屈伸を始めた。

「馬のひづめの音だな。最近ではほとんど聞かなくなった」

私は呟いた。微かに地面を叩くリズムミカルな音が聞こえてくる。

最近、人力車が大いに流行っている。従来の駕籠が廃れてきた。

遠出するのにも人力車が多い。それにしても馬、それも目立つ白馬に跨って少女が駆け抜けるなどというのは聞いたことも見たことも

ない。

「来た、来た、来たぞ」

原田が興奮している。馬が見えた。疾走しているわけではない。ここまでの街道は早く走ってきたかもしれないが、さすがに街中が近くなって歩を緩めたのだろう。

馬は、ゆつくりと脚を繰り出している。その馬上には姿勢を正して白い袴に赤い振袖姿の目にも鮮やかな少女が跨り、身体を揺らしている。

「いよいよだぞ。オイ、準備はいいか」

原田が幫間男に声をかけた。

「へい、用意万端でやす」

幫間男は、腰は引けているものの、今にも飛び出さんと身構えた。

馬と小奴の姿が近づいてきた。両国橋から続く川土手をこちらに向かつてくる。

私たちは、川土手の街路樹の陰に隠れているので小奴からは見え
ないはずだ。

凛々しい。そのひと言に尽きる。まだ遠目だが、小奴の姿は、ま

るで錦絵に描かれた若侍のようだ。もし、ここに弁慶べんけいがいたならば、

牛若丸うしわかまる参上と言ってもいいだろう。

馬がすぐ近くまできた。

「今だ、さあ、行け」

原田が幫間男の尻を叩いた。

幫間男が、腰を低くして、馬の前にまるで大砲の玉のように飛び出そうとした。

その時だ。ワンワンワン。急に犬が幫間男の尻にかみついた。一匹ではない。三匹もいる。先ほど、幫間男が木の枝で追い払った犬が、よほど腹が立ったのか、仲間を連れて戻ってきたのだ。

「あれれ！」

幫間男は、馬の前に飛び出す前に、犬に驚き、道路に転んでしまった。

ワンワンワン！ ワンワンワン！

犬が、幫間男の服を噛んで引きずる。

「止める！ 止める！」

幫間男が、両手両足をバタつかせる。

ヒヒヒーン。馬が嘶いた。飛び出してきた男と犬に驚いたのか、

前脚を高く上げる。

「きゃあ！」

小奴が叫んだ。手綱を握りしめているが、あまりにも馬が高く立ち上がったために鞍から振り落とされそうだ。

ワンワンワン！

ヒヒヒヒーン！

「た、助けてくれ！」

幫間男は、犬を振り払うと、一目散に逃げだしていく。

「あ、あいつ！」

原田と上野が、予想外の成り行きに何もできずに呆然と立ちすくんでいる。

幫間男が消えてしまい、攻撃対象を失った犬たちは、馬を襲いだした。

ヒヒヒヒーン。

馬は、前脚、後ろ脚を交互に蹴り上げ、犬から逃れようとする。

「あーっ」

長い悲鳴とともに小奴が馬から振り落とされた。

私は、その瞬間を見逃さなかった。素早く動き、馬の傍に近づき、小奴が馬から振り落とされると同時に、両手でその身体を抱き止めた。

まだ確か十四、五歳だと聞いている。軽いには軽いだが、両腕にはしっかりと小奴の肉の柔らかさ、膨らみが感じられる。

私は、よろけながらも絶対に倒れまいと両足を踏ん張った。

「大丈夫か？」

ようやく原田と上野が駆けつけてきた。そして私が倒れないよう

に二人で支えてくれた。

「ありがとう。大丈夫だ」

私は、二人に言った。

その時の、二人の顔、特に原田の顔は忘れられない。くしゃくしゃに表情を歪め、今にも泣きそうなほど、情けない顔なのだ。悔しさ、腹立たしさ、後悔、自分に対する責め苦など、ありとあらゆる負の感情が渦巻いていた。

原田は、自分が小奴を受け止め、抱く役割を担うつもりだったのだ。それが野良犬の闖入ちんにゆうによっておじゃんになってしまった。

私は、原田の顔を見て、笑いを堪えるのに必死だった。あまりの愉快さに表情が崩れてしまいそうになった。

しかし笑うわけにはいかない。私の腕の中には、恐怖で怯えている小奴がいる。

「上野、馬、馬を捕まえろ」

私は言った。

野良犬は消え去っていた。馬は、ようやく落ち着きを取り戻し、少し離れた場所ですっと佇たたずんでいる。

「承知した」

上野は、小走りに走り、馬の手綱を掴んで、こちらに連れてきた。

「大丈夫でしたか？」

私は、腕の中で目を閉じる小奴に声をかけた。
静かに目を開けた。

「どちら様かわかりませんが、ありがとうございます」

肌は透き通るように白く、眉はきりりとし、目は鈴のようにつぶらである。その輝きは、思いの他、知的な印象だ。聡明な少女なのだろう。

私は、その瞳に魅入られた。身体がしびれる。唇はくちびる渴き、喉ののど奥がいがらつぽくなる。全身に熱があるような感覚だ。

「ファム・ファタール……」

私は呟いた。

運命の女、魔性の女の意味だ。

「何か？」

小奴が私の呟きを耳にし、聞き返した。

「いえ、何も」私は、動揺していたが、それをうまく隠し、落ち着いて答えた。「では足をつけましょうか」

「はい。お願いします」

小奴は私の腕の中から離れ、地面に足をつけた。

袴の裾を白く可愛い手で軽く払った。

「私たちは慶應義塾の塾生です」

原田が一步前に進み出て、勢い込んで自己紹介を始めた。「私は、

原田と申します」

小奴は原田を一瞥いちべつしただけで私に向き直った。

「お兄様、改めてお礼申し上げます。ありがとうございました」小奴が軽く頭を下げた。「お兄様のお名前は？」

「私ですか？」

まるで年上の女から聞かれているような気分気分に陥った。大きくつぶらで潤うるんだ黒い瞳が、私をしっかりと捉え、離さない。

「私は、岩崎桃介と言います」

おかしいことだが、私は緊張していた。

「桃介？ 果物の桃ですか？」

小奴が小首を傾かしげる。

「ええ、その桃です」

「桃太郎さんなんですね」

小奴は小さな口を手で押さえ、ころころと弾むように笑った。

「おいおい、俺を忘れないでくれよ」

馬の手綱を持ったままの上野が不満顔で言った。

「申し訳ありません。私が手綱を持ちます」

小奴は、上野から手綱を受け取ると、馬の頬を優しく撫でた。

「彼は、上野と言います」

私は、上野を指さした。上野が軽く頭を下げた。

「この子は、人を選びます。大人しくしていましたが、あなたのことを気に入ったのでしよう」

小奴は、上野に笑顔を向けた。

「恐縮です」

上野は、褒められ、頭を搔いた。

収まらないのはこれを企画した原田だ。自分が主役になるはずが、脇役にもならない。やや剣呑な態度で「君の名前は？」と聞いた。

「申し遅れました。わたくし私は葭町の浜田屋におります小奴と申します。まだ半玉でございます。よろしく願います」

小奴は丁寧に頭を下げた。

「葭町の浜田屋と言えば、一流の置屋だ。さぞや名士の客が多いのだろう？」

原田が肩をそびやかして言った。少しでも大物に見せようというのか。

「はい。多くのお客がお見えになります。皆さん方もお偉くなられたらぜひ遊びに来てください」

小奴は、笑みを浮かべて、原田に頭を下げた。

「乗馬をするとは、驚きです。どこで習われましたか？」

私は聞いた。

「お義母かあさんの方針で、できることは何でも勉強しなさいと、乗馬

だけではなく水泳も習っています。師匠は、浜田屋のお客様です。そのほかにも踊り、三味線、謡、英語などいろいろ習い事は多いのです。ではこれで失礼します」

一人前の芸者になるためには、いろいろなことを習得しなければならぬのだ。

小奴が馬の手綱をくいと引いた。馬の脚が動き出す。

「また変なのが現れるかもしれん。送ってしんぜようか」

原田が、尊大な様子で言った。

「お気持ちだけで結構です。でも……送っていただけののなら……」
小奴は、思わせぶりに私を見つめた。「桃太郎さんに送ってもらいたいと思います」

「桃太郎ではありません。桃介です」

私はきつく言った。

「ごめんなさい。桃がつく名前って桃太郎しか知らなかったものだから」

小奴の笑いにつられて、私も笑ってしまった。

これほどあけすけに自分の欲求を口にする少女を知らない。徳川の時代から十数年を経ただけで、これほど主張のある女性が登場するのだ。私は、驚きを持って小奴を見つめていた。

「しょうがない。小奴さんは桃太郎に任せたよ」

原田が諦めたように言った。

「俺たちは邪魔なようだから、さっさと消えろとするか」

上野が言った。

「それではご希望通り、お送りしますが、私は馬には乗れません」

「大丈夫です。歩いてまいりましょう。馬も成田山まで往復で疲れ
ていきますから、ちようどよろしいですわ。では参りましょうか」

小奴は、馬の手綱を引き、歩き始めた。彼女の背丈の倍以上もあり
りそうな馬を引き、堂々と歩く姿は、若い女性が馬を引く奇妙さと
相まって、沿道の人の注目を集めた。

私は、彼女の後ろをついて歩くだけだ。これでは送っているのか、
送られているのかわからない。主客転倒とはこのようなことをいう
のだろう。

しかし、私は愉快でたまらなかった。まるで道化を演じているよ
うだからだ。

デフレーションの進行で、世の中の人はうつむき気味で、世間は
くすんでいる。その中を錦絵から飛び出してきたような目にも鮮や
かな白馬と美少女が歩いているのだ。沿道の人から、よっ、ご両人
とか何とか声かけられるかもしれない。そうなればもっと愉快だ
ろう。

「私は、日本橋で生まれたのです」

小奴は、自分の身の上を話し始めた。

私は、黙って耳を傾けていた。

「両替商の越後屋えちごっていうのをご存じかしら？」

「いいえ。存じません」

「そう。とても立派でしたの。私、その家で十二番目に生まれたのですが、もう、その頃から商いが上手くいかなくなっていたんですね。それで七歳で浜田屋おかみの女将おかみの養女になりました。三歳で踊りなども習ってありましたから、芸の世界に憧れもありまして、私としては渡りに船というところかしら。あなたは？ 桃介さん」

小奴が上目遣いに私を見る。その瞳の力に当てられると、一瞬、たじろいでしまうほどだ。

「私などは、語るほどの生まれではありません。川越の水呑み百姓のせがれです。支援していただけの人があり、慶應義塾で学ぶことができております」

「自分のことを水呑み百姓の生まれなどと卑下されるのは、余程、自信がおりなのですね」

「そんな……事実です」

私の自虐じとく的ともいえる水呑み百姓出生論を、自信の表れという鋭さに私は感服した。実際、そうかもしれない。底の底から這い上がり、昇り詰めようという思いがなければ、自らを貶おとしめることはない。

「将来は何におなりになるおつもりですか？」

再び、小奴が私を見つめた。

「まだわかりません」

私は答えた。

「そうですね。でも偉くなって私をお座敷に呼んでくださいな。私は、今、小奴と言いますが、本名は貞さだと言います。葭町に奴という名妓がおられたようで、お義母さんが、その方にあやかつて小奴と名付けてくださいました。今は十四歳ですが、いずれ近いうちに奴と名乗つて座敷に出る予定です」

小奴は、わずかに目を伏せた。自分の運命が決まっていることへのやるせなさが垣間見えた気がした。

「貞というのですか。私の母と同じ名ですね」

私は、そこでもファム・ファタールという言葉が浮かんだ。

母は、美しく、田舎にあつては教養のある女性である。私の塾への進学を心から喜んでくれた。

私が川越の水呑み百姓の息子というのは卑下でもなんでもない。事実である。実際は、川越よりもっと田舎の村の生まれである。父は、百姓に向くような性格も体力もなかったので川越に出て、商売を始めたが、さほど上手くいかなかった。運が少し開けたのは、明治十一年（一八七八）に川越に国立第八十五銀行が出来てからであ

る。父が文を書けるといふことで行員に採用されたのだ。それでなんとか生活の息をつくことができたのである。

そんな貧しさが前面に出た生活を、私は惨めだとか、恥ずかしいと思つたことはない。ただし、貧しさが邪魔をして思うような人生を歩けなくなることだけが悔しかった。だからなんとしてもその貧しさから抜け出たいと熱望していた。

「桃介さんのお母様と同じ名前ですか。縁を感じます」小奴が私を見つめて微笑んだ。「ねえ、桃介さん、私を待ち伏せしていたんでしよう」

「えっ、そんなことは……」

「ないと言わせませんよ。私、馬上から見ていたんです。なんだか怪しい人たちがいるなって」

小奴が悪戯いたずらっぽく笑つた。

「バレていたのですか」

「時々、そういうことをなさる殿方がおられるのです。いつもなら馬を早駆けさせて通り抜けるんですが、今日はなぜかゆつくりと進んでしまいました。それにしても、あの犬には驚きました」

「私も驚きました」

私の答に小奴が意外な顔をした。

「あの犬は仕掛けではないんですか？」

「はい。たまたまです」

私は正直に答えた。

小奴がくすつと笑った。

「何がおかしいのですか」

「あの犬がいなければ、馬は驚かなかったでしょうね。あのへんな男の人が前に立ったくらいでは馬はなんとも思いませんから。ご縁ですね」

「はあ、なんとも……。でもこんな仕掛けをして申し訳ありません。言い訳しても仕方がありませんが、私の発案ではないんです」

私は言った。

「謝ってもらう必要はありません。これもお不動様のお導きかと思えますが……」小奴は私を見つめた。馬が歩みを止めた。小奴は成田山の不動明王を深く信心しているのだろう。「私、今、ドキドキしています。桃介さんが好きになったみたいです」

私は、小奴の突然の告白にうろたえた。なんと答えていいのだろうか。心に秘めておくべきことを素直に口に出す女性は初めてだ。

白馬は、軽いひづめの音を立てながら歩き始めた。

「私も同じ気持ちです」

私は答えた。

答えてしまった、というのが正直なところだ。嘘を言っても始ま

らない。私は、小奴に魅了されていた。こんな気持ちになるのは経験がない。胸が急に苦しくなる。かきむしられたようで、息が苦しい。小奴の顔をずっとずっと見つめていたい。

「嬉しいです」

小奴が言った。

「浜田屋が見えてきました。私はここまです」

私は立ち止まって小奴に言った。胸が痛い。これが恋というものなのだろうか。私には初めての経験だ。今まで女性とこれほどまでに離れがたく思ったことはない。ましてや小奴とは、つい先ほど出会ったばかりだ。いくら軽薄を自認している私でも軽薄過ぎないだろうか。こんなに簡単に女性を好きになってしまうのだろうか。離れがたく思うのだろうか。

「また会えますか？」

小奴が聞いた。

「会いたいと思いますが、私が入りできるところではございません」

私は正直に言った。塾生の分際で、料亭に通うわけにはいかない。この制約があることが、余計にこのような名状しがたい感情の動揺を引き起こすのだろう。

「私がなんとかします」小奴は小指を差し出した。「指切り。また会

えますように」

「また会えますように。私のファム・ファタール」

小奴の小指に、私の小指を絡ませた。途端に電流が走った。小指の先から、足のつま先まで一瞬に電流が走り、びりびりとしびれる感覚に襲われた。私は、思いきり小奴を抱きしめたい衝動にかられた。奥歯をぐつと強く噛み締めて、その衝動を必死で抑え込んだ。た。

〈つづく〉